

東 牧 小 苦

MRリハビリ機器「リハまる」

高次脳機能障害患者にADL回復効果

苦小牧市の苦小牧東病院（橋本洋一理事長・260床）は、現実世界に3次元画像を重ね合わせるMR（複合現実）を用いたりハビリソフトウェア（「リハまる」）を導入し、改善に役立てている。

注意障害や半側空間無視

リハまるは、ベンチャー企業

の技術。

が主症状の患者に活用している。上肢運動などのリハビリと組み合わせることで、ADL、IADL（手段的日常動作）の

リハまるは、ベンチャー企業のテクニコが関西医科大と共同開発。MR技術を用いた5つのリハビリプログラムを備える。同市のイノベーター

シオンマッチング実証事業のモデルケースとして検討を重ね、2018年度に本格導入した。これまでに100人以上の患者に提供している。

例えば「数字抹消」の訓練では、現実空間に球体が浮かんだ状態で見えるが、患者はその球体の数字を順番に探し、専用

MRは、専用ゴーグルに内蔵されたカメラやセンサーが現実空間をスキャンし、床や壁などを立体的に表示され、そこにCG画像を重ね合わせ

ゴーグルでカーソルを合わせて、手に持った専用スイッチで押して球体を消していく。専用ゴーグルを着用するだけで、ゲーム感覚で楽しく課題に取り組めるという。

同病院では、高次脳機能障害のある患者を対象に、専用ゴーグルをつけて病棟内を歩行し、注視するタイミング、環境を

その結果、退院時には、手指は正常に近いステータスで、片側空間無視の評価（CBS）は中程度から軽度へと空間認識能力が改善。ADLも入浴以外は介助なく自立でき、家事動作が困難だったのが、茶碗洗いやテーブル拭きなど一部の家事役割を獲得したという。



MRゴーグル（ヘッドマウントディスプレイ）



ゴーグルをつけると、訓練の課題が空間に浮かび上がる

確認してきた。注視先は緑色の点で表示されて、自動でパソコンに記録される。

でのADL、IADL練習など複合的にリハビリを実施し、効果を検証した。

「患者とリハビリスタッフと一緒に映像を確認することで、どこを注視できていないかを本人が気付くきっかけになる事が大きなメリット。日常生活動作に、しっかりと落とし込むことができると、佐々木真史作業療法士。

同療法士は、手指・上肢・下肢に軽度麻痺（フレックス）で左側や足の認識が困難な高次脳機能障害を持つ70代の入院患者に対し、リハまるの探索、注意課題、上肢リハビリ装置による訓練、実場面

同病院では、高次脳機能障害のある患者を対象に、専用ゴーグルをつけて病棟内を歩行し、注視するタイミング、環境を

同療法士は「同機 奮戸英臣部長は「同機